

# 異年齢集団のコラボレーションによる 食育システムの構築 (3)

— 中学生に焦点をあてた食育実践の取り組み —

田口浩 継\*・桑畑美沙子\*\*・宮瀬美津子\*\*  
萩嶺直孝\*\*\*・隅田博美\*\*\*

Building a Dietary Education System through the Collaboration  
of Members of Age-Variant Group (3)

— A Dietary Education Approach with Focus on Upper-Grade Children —

Hirotsugu TAGUCHI and Misako KUWAHATA and Mitsuko MIYASE  
and Naotaka HAGIMINE and Hiromi SUMIDA

## はじめに

今日、食育の重要性については、だれもが理解し広く周知するところであるが、子どもたちの食生活や食を取り巻く環境が改善されたとは言いがたい現状がある<sup>1)</sup>。食育に関しては、就学前から思春期に至るまで取り組むことが重要と考えられる。特に、就学前の食環境の改善に関しては、保護者の理解と協力が不可欠である<sup>2)</sup>。

そこで、図1に示すように、幼稚園児、小学生、中学生および幼稚園児の保護者に対して、作物の栽培、調理、調べ学習、絵本作り、読み聞かせなどの活動を通して、食生活の改善と望ましい食環境作りを目指すこととした。さらに、食に関する絵本を媒体にして、幼稚園児および小学生と中学生間の交流を図る。また、それらの活動に教育学部学生・院生が関わることにより、教員としての資質向上を図る。

本報では、幼・小・中学校と大学との連携で行った食育に関する実践・研究のうち、主に中学校での実践について報告する。

## 研究計画

実際に甘藷、大豆などの作物を栽培し、自ら収穫した食材を調理して食する活動は、それらの食

材に対する理解や思い入れが高まる点で、その教育的効果が期待されている。しかし、多くの生徒は、農業体験がなく「作物を育てた」経験者は非常に少ない。また、外食、中食の利用増に伴い野菜、特に食物繊維の摂取不足についても危惧される。

これらに対応するために、中学生に作物の栽培を体験させるとともに、それらを用いた調理を行わせる。また、中学生に小学生の調理活動の支援者として関わらせることにより、食育の楽しさや重要性に気づかせることを目的とする。さらに、幼稚園児および小学生（低学年）を対象とした絵本（幼稚園児にはフェルトの絵本、小学生には電子絵本）の制作を行うとともに、直接、制作者が園児・児童に読み聞かせる場を設定することとした。

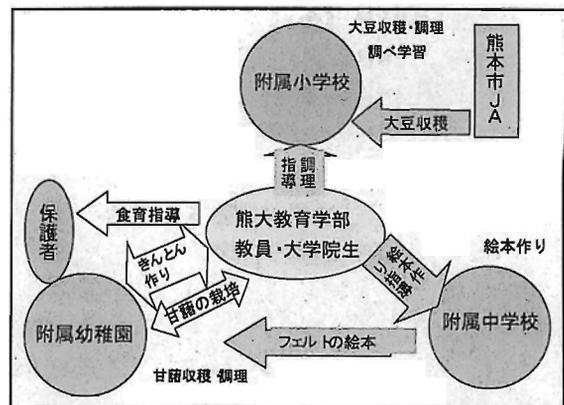


図1 研究組織と活動内容

\* 熊本大学教育学部技術教育

\*\* 熊本大学教育学部家政教育

\*\*\* 熊本大学教育学部附属中学校

平成17年度は、幼稚園児は大学の附属農場で甘藷の植え付けと収穫を行い、さらに、収穫後に調理（きんとん作り）を体験しているため、園児用の絵本の題材は甘藷とした。また、小学生は刈り取った大豆を乾燥させ、その種（大豆）を収穫した後、大豆を用いた調理（味噌、きな粉、豆腐作り）を体験しているため、児童用の絵本の題材は大豆とした。これらの活動には、教育学部の学生・院生が指導支援者として、授業に参加することとした。これらは、学生・院生の教師としての指導力向上を含めた資質向上を目的としている。

### 実践内容

平成17年度実施した附属中学校における食育実

践の内容を表1および表2に示す。

表1は、選択技術を履修した生徒が、小学生を対象にした絵本作りを主な活動とした食育の実践を示している。1時間目に本授業の目的と日程について説明した後、附属中学校で栽培している作物の観察を行うとともに、収穫した。

2時間目は小学校と合同で、大豆を使った食品作りを行った。具体的には、小学校2年生1クラスを3班に分け、味噌、きな粉、豆腐作りを行う。その時、指導支援者として選択技術と選択家庭の生徒（19人）が、各班に分かれ参加した。図2、3に活動の様子を示す。3時間目はプレゼンテーションソフトの基本操作の確認を行うとともに、甘藷を題材とした電子絵本の作成計画書の検討を

表1 電子絵本の作成を題材とした指導計画

実施日	主な活動内容
11月25日（金）	オリエンテーション、学校農園で作物の観察と収穫
11月28日（月）	小中合同授業（大豆を使った食品作り）
12月9日（金）	パワーポイントの基本操作確認、電子絵本の作成計画書の検討
1月13日（金）	電子絵本の作成計画書の完成、インターネットや書籍を使って大豆についての情報収集
1月20日（金）	インターネットや書籍を使って大豆の情報収集、スライドの計画書作成（絵コンテの作成）
2月3日（金）	インターネットや書籍を使って大豆の情報収集、スライドの計画書作成、スライド制作
2月10日（金）	スライド制作
2月17日（金）	スライド制作、読み聞かせ準備
3月3日（金）	小中合同授業（電子絵本の発表会）

表2 フェルトの絵本の作成を題材とした指導計画

実施日	主な活動内容
11月25日（金）	オリエンテーション、学校農園で作物の観察と収穫
11月28日（月）	小中合同授業（大豆を使った食品作り）
12月9日（金）	ビデオ教材「さつまいもの栄養や特徴について」の視聴、書籍・インターネットによる情報収集
1月13日（金）	フェルトの絵本の作成計画書の検討、インターネットや書籍を使って情報収集、制作に用いる材料や縫い方の確認
1月20日（金）	絵本の計画書の作成、フェルトの絵本制作
2月3日（金）	フェルトの絵本制作
2月10日（金）	フェルトの絵本制作、読み聞かせ準備
2月17日（金）	幼中合同授業（さつまいもの絵本の読み聞かせ）
3月3日（金）	学校農園での収穫物を使った調理、さつまいもを使った調理、学習のまとめ



図2 豆腐作りの様子



図3 試食会の様子



図4 電子絵本の読み聞かせ

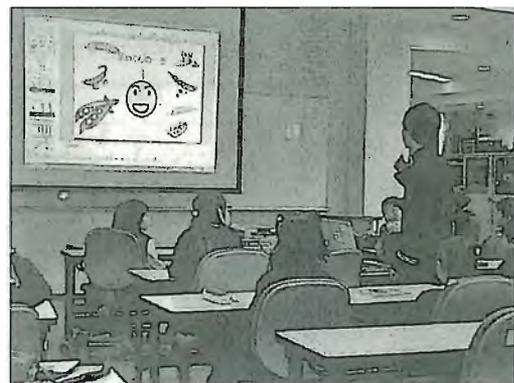


図5 質問の時間の様子

行う。この時、電子絵本のサンプルとして、大学院生が作成したスライドを活用した。4時間目はインターネットや書籍を使って大豆についての情報を収集しながら、電子絵本の作成計画書を完成する。5～8時間目は、インターネットや書籍を使って大豆の情報を収集しながら、電子絵本（スライド）の作成を行う。8時間目の後半には、各班毎に発表（読み聞かせ）の練習を行う。9時間目は小学生に対して、読み聞かせを行うとともに、小学生からの質問の時間を設定する。図4、5は、中学生による読み聞かせの様子を示している。なお当日は、小学生を2班（各班19名）に分け、技術室とパソコン室で実施した。

表2に、選択家庭を履修した生徒が、園児を対象としたフェルトの絵本作りを主な活動とした食育の実践を示す。1時間目と2時間目は、選択技術の生徒と同じ活動を行う。3時間目は、「さつまいもの栄養や特徴」についてまとめたビデオ教材を視聴する。さらに、甘藷に関する書籍やインターネットによる情報収集を行う。4時間目はインターネットや書籍を使って情報を収集すると

もに、甘藷のフェルトの絵本の作成計画書を検討する。さらに、制作に用いるフェルトの種類やボタン、金具、糸などの材料の紹介を行うとともに、用途に合わせた縫い方の確認を行う。5～7時間目は、インターネットや書籍を使って甘藷の情報を収集しながら、フェルトの絵本の作成を行う。7時間目の後半には、各班毎に発表（読み聞かせ）の練習を行う。8時間目は、幼稚園児に対して、読み聞かせを行うとともに、園児からの質問の時間を設定する。図6、7は、中学生による読み聞かせの様子を示している。当日は、附属幼稚園の体育館で、園児を小グループに分け、読み聞かせを行った。9時間目は、学校農園で収穫した甘藷を使った調理を行うとともに、学習のまとめを行う。なお、本活動に参加した生徒は、選択技術9名、選択家庭10名である。表3に小学校2年生と中学生による大豆を使った食品作りの概要を示す。当日は、池田屋醸造合名会社の塩津美智子氏が味噌作りの際にTTとして参加し、煮た大豆から味噌を作るまでの作業について、説明と指導を行った。



図6 フェルトの絵本の読み聞かせ1



図7 フェルトの絵本の読み聞かせ2

表3 小学2年生と中学生による大豆を使った食品作り

きな粉づくり	豆腐づくり	味噌づくり
1.鉄製フライパンで大豆を炒る。 2.石臼ですり潰す。 3.砂糖と塩で調味する。 4.白玉団子にまぶして試食する。	1.大豆をミキサーで潰して豆汁にする。 2.豆汁を加熱する。 3.木綿の袋に入れて絞り、豆乳を作る。 4.豆乳ににがりを入れて固める。 5.切って盛り付け試食する。	1.煮大豆をすり鉢で潰す。 2.麴と混ぜる。 3.味見をする。 4.瓶に詰める。 5.重石を載せ布巾を掛ける。

### 結果および考察

#### 1. 選択技術の実践結果

選択技術においては、小学生との交流体験は、11月に大豆を用いた食品作りを行い、3月に電子絵本による「大豆についての読み聞かせ」を行った。「読み聞かせ」活動の後、各生徒に対して「活動の記録」として、制作の工夫点、活動後の感想についてまとめさせた。また、表5に示す9つの項目について自己評価を行わせた。自己評価は、A：よくできた、B：できた、C：あまりできなかった、D：できなかったの4件法による評価とした。さらに、指導教師および生徒に対して聞き取り調査を行った。表4に活動に対する感想・反省を、表5に活動に対する自己評価結果を示す。また、活動に参加した小学校2年生にも、活動後の感想と、「わかったこと」についてまとめさせた。

活動全体に対する意見を聞き取り調査した結果、選択技術を履修した生徒は、学校園の作物の収穫作業や小学生との調理実習に大変興味を持ち参加

していることが分かった。きな粉や味噌、豆腐作りは中学生にとっても初めての経験で、多くのことを学んだという感想が多数の生徒から出された。また、小学校2年生と合同で実習を行ったことで、小学校低学年の児童の実態を知ることができるとともに、楽しく実習を行うことができたと述べている。さらに、これらの経験を行った上で、電子絵本作りに取り組むことにより、対象とする小学生の実態をある程度理解し、イメージした上で絵本作りを行ったとしている。教師からも、中学生自ら、大豆から味噌やきな粉、豆腐を作る経験は初めてであり興味を持ち参加していた。そのことが、絵本作りに対する動機付けに大きく影響を与えていると分析している。小学校と連携した実践は、行事や日課の調整、事前準備と課題も多かったが、単独で行う授業以上に、教育的効果が見られる部分もあったと述べている。

#### 2. 選択家庭の実践結果

選択家庭では、小学生との交流体験は11月に大豆を用いた食品作りを行い、幼稚園児とは2月に

表4 活動に対する感想・反省

《プレゼンテーションの工夫》

- ・パワーポイントを使い作品を作っていく中で、小学校2年生に分かりやすく伝えることがとても難しかったです。
- ・漢字や話の中の言葉などを、2年生にもわかるように変えていくことがとても大変でした。
- ・プレゼンテーション用の材料を集めるのが大変だった。
- ・小学生に分かりやすく、楽しく見せるために作ることに苦労した。
- ・大豆仙人というキャラクターを作り、親しみやすくしたのが効果的だった。
- ・スライドの中に取り入れるキャラクターなども、ペイントを使って描いていき、その場にあう表情や体勢、服装などを考え、描いていくことが一番難しかったです。友だちとも意見を交換しながら作っていくことができた。

《小学生との関わりの反省》

- ・予想外の質問にとまどってしまい、きちんと受け答えできないところがあった。

《電子絵本の効果の実感》

- ・小学校2年生にちゃんと伝わったか分からないですが、大豆のすごさはわかってもらえたと思います。
- ・問題がかぶってしまったことがあったのは少し残念だった。だが、逆に復習という形になったため、小学生にとってはよかったかも知れない。
- ・スライドショーが、小学生にも好評だったのでよかった。
- ・小学生が自分の発表で喜んでくれたのがうれしかった。プレゼンをしたかいいがあった。

《活動に対する満足感》

- ・パワーポイントの機能もいろいろ知ることができた。
- ・大豆についていろいろ調べて自分でも知らないことをいくつも知ることができました。
- ・調べたことを自分なりにパソコンでまとめることができた。
- ・学習を通して、自分の得意なことに気づいてよかったです。
- ・パソコンを使ったパワーポイントで、大豆というテーマのもと、しっかり頑張ることができた。
- ・キャラクターからすべて自分で作ったので満足いくものになった。
- ・この選択技術を通して調べたい課題の見つけ方や、分かりやすい発表方法、コンピュータの操作など、さまざまな技術を身につけることができた。来年も引き続きあらたな技術を身につけたい。
- ・大豆についていろいろな知識を知ることができた。
- ・パワーポイントのいろいろな使い方を知ることができて、とても良い勉強になった。
- ・ハイパーリンクなど新しい技術を知ることができた。今後、身につけた技術を生かしていきたい。
- ・スライドショーを作って、小学校2年生に発表するところまでたどり着けた。
- ・パソコンを使ってプレゼンテーションしたのが楽しかった。
- ・少しふざけて怒られたこともあったが、それはそれで良い勉強になった。
- ・いろいろなことを選択技術で学ぶことができた。
- ・いろいろ発展していくスライドショーを作ることができた。
- ・小学校2年生を相手にして、発表し質問を受けたことも勉強になった。

表5 活動後の自己評価（選択技術）

評価項目	N=9			
	A	B	C	D
1. これからの学習に対して問題意識を持って、課題を設定することができた。	5	4	0	0
2. 課題解決に向けて、見通しを持って調査・研究の仕方について計画することができた。	2	5	2	0
3. 見通しをもって、課題解決にむけて意欲的に追求することができた。	4	4	1	0
4. 予想や活動結果をもとに、自分なりの結論を出すことができた。	3	5	1	0
5. 自分の考えや意見を作品などにまとめ、わかりやすく表現することができた。	7	2	0	0
6. 他の人の作品に、作品のよさや改善点について進んでアドバイスすることができた。	5	1	3	0
7. 見直した自分の考えや意見を作品などにまとめ、わかりやすく表現することができた。	6	3	0	0
8. 学習の成果を確認し、これからの課題を見つけることができた。	4	4	1	0
9. 自分自身の得意なこと・よさ、課題に気づくことができた。	4	4	1	0

A:よくできた, B:できた, C:あまりできなかった, D:できなかった

フェルトの絵本による「さつまいもについての読み聞かせ」を行った。「読み聞かせ」活動の後、各生徒に対して「幼児との交流体験記録」として、①課題、②課題解決の方法、③活動内容、気づいたこと・わかったこと、④実習後の感想についてまとめさせた。また、表6に示す4つの項目につ

いて自己評価を行わせた。自己評価は、A：よくできた、B：できた、C：不十分の3件法による評価とした。

幼児との交流体験は、平成18年2月17日（金）に熊本大学附属幼稚園の3歳児を対象に行った。課題は、「さつまいもに興味をもたせる」とし、

表6 活動で気づいたこと・わかったこと（生徒）

《幼児の実態の理解》

- ・元気がありそうな人に幼児はなつく。
- ・幼稚園児に「さつまいも」という平仮名を読めるかどうか聞いてみたが、まだ読めなかった。3才（4才）児には、まだ文字が読めないようだった。
- ・3歳はもう少し大きいイメージがあったけどまだ小さくビックリした。
- ・年少の子たちは、年中の子たちと違って長時間じっとしていることができないということが分かった。
- ・3歳児は、ボタンをとめたり外したりなどがとても上手にできていた。
- ・3歳の子は、自分の名前をきちんと言えたり、ボタンを開け閉めできたり、挨拶をしっかりとっていたのですごいなあと思った。
- ・自分が3歳の時は、こんなにできたかなあ？と感じた。
- ・私たちより幼稚園児の方が、あいさつや話しの聞き方が上手なような気がした。
- ・人の話は、目を見て聞いてくれる。または、絵本などをじっと見て聞いてくれる。
- ・園児の反応がいい。素直でかわいい。元気が良くて、ふれあうことが好き。
- ・楽しいときと不満なときがすぐにわかった。感情がすぐ顔に表れていた。

《読み聞かせの工夫》

- ・まだ3歳だったので、言葉もあまり難しいことが使えなかったので苦労した。
- ・さつまいものぬいぐるみや引っ張ると抜けるさつまいもに興味を持っていた。
- ・園児はあけたりする仕掛けが好きなようだった。
- ・ファスナーを開いたり、さつまいもをポケットから取り出したりするのが好きなようだった。

《幼児との関わりの反省》

- ・一人の子だけでボタンを外したりしていて、他の子達ができない時があった。もう少し沢山遊べる所を作ったらよかった。
- ・触ったり自分で布をめくるといことが大好きで、聞かせるだけではだめだということに気づいた。
- ・3歳児は、言葉で話したり、ジェスチャーで伝えようとする、わかってくれたけれど、ひらがな・かたかななどで伝えようとするとなかなか伝わらなかった。
- ・もう少しマジックテープ、ボタン、ファスナーなど、さわって遊べるものをたくさん取り入れると、楽しくできると思った。
- ・早く説明すると戸惑うときがあった。・接着用のボンドは弱いので工夫が必要だった。

《読み聞かせの効果の実感》

- ・幼児はまだ小さくて、思ったようにストーリーを話し進めることができなかった。でも、何度か話すと慣れてくれて、絵本に興味を持ってくれた。
- ・目を見て話すと効果的だった。 ・とても楽しそうにしていた。
- ・好奇心がとてもあって楽しそうにボタンはずしなどをしながら遊んでいた。
- ・私たちに比べて想像力が豊かだった。

中学生が甘藷を題材としたフェルトの絵本を作成し、読み聞かせやボタンの脱着などの活動を取り入れ、楽しませながら甘藷について興味・関心を高める活動を行っている。これらの活動から中学生が気づいたこと・わかったことについて分類すると、表6のようになった。

活動全体に対する意見を聞き取り調査した結果、選択家庭を履修した生徒は、小学生との調理実習や絵本作りに大変興味を持ち参加していることが分かった。幼稚園児と関わることは、中学生にとってもまれな経験で、いろいろな気づきがあったという感想が多数の生徒から出された。しかし、読み聞かせの対象である園児の実態や嗜好について知る機会がなかったために、実際に読み聞かせながらその方法の修正・改善を行っている。活動後も、幼児用の絵本に求められるポイントを多くあげていた。次年度においては、事前に対象とする園児の実態をつかませるために、触れあう機会を設定することが望まれる。ただ、生徒の多くは園児の反応に戸惑いながらも、楽しく実習を行うことができたと述べている(表7)。教師からも、絵本作りを行う時間を十分確保できなかった割には、楽しく親しみのある絵本ができたと評価している。制作では、被服に関する既習知識を生かし、適切な制作がなされていた。また、園児との交流体験では、保育の学習としても効果的な学習活動がなされたとしている。

### 3. 小学生の感想・反応

選択技術で制作した電子絵本の読み聞かせの後、今回の活動で気づいたこと・わかったことについて、児童に調査した(表8)。

多くの児童が、大豆について興味・関心を示し、多くのことを学んだと回答している。大豆に対する幅広い知識を得るとともに、食品としての有用性についても理解できたことから、これからの食生活に大豆や大豆食品を多く取っていきたいと述

べている。今回の実践は、単なる知識の伝授に留まらず、生活の改善にまで進めることができたことが大きな成果であると言える。

また、中学生の調べ学習の仕方や発表の仕方についてもあこがれを持つとともに、感謝の気持ちを表している。これは、異校種間の実践による効果であると言える。小学校教師からも、小学校・中学校・大学の連携による食育に関する継続的な学習の場の設定を望む意見が出された。さらに、小学生の保護者から、「授業をきっかけに、日々の食事に気をつけ、食が体をつくっていることを感じ、考えるようになってくれたらと思います。」などの要望も出されている。今回の実践をきっかけに、家庭で大豆やその製品、食事に関する会話もなされたという報告があった。

### 4. 考察

選択技術を履修した生徒は、学校園の作物の収穫作業や小学生との調理実習に大変興味を持ち参加していることが明らかとなった。また、これらの経験の後、電子絵本作りに取り組むことにより、対象とする小学生の実態をある程度理解した上で絵本作りができたと言える。中学生にとっても、大豆から味噌やきな粉、豆腐を作る経験は初めてであり、大豆やそれを材料とした製品に対して興味を持った後、絵本作りに取り組んだことは、動機付けに大きく影響を与えていると言える。完成した絵本について分析すると、対象の実態をよく捉えそれに合わせた内容や表記になっていることは評価できる。ただ、内容の深まりという点では、一般的な域を出ていない。実際に大豆を栽培したり、大豆の栽培や調理に関わってきた地域の方の話を聞く機会を事前に設定していれば、さらに実感のこもった、地域の食文化に根ざした内容になった可能性が高い。今後の検討課題としたい。

選択家庭を履修した生徒は、これまで幼稚園児と交流することは少なかったことから、今回の交

表7 活動後の自己評価(選択家庭)

		N=10		
評価項目		A	B	C
1	幼児と積極的に関わる事ができた。	6	4	0
2	自分の課題を解決することができた。	4	5	1
3	幼児と仲良く遊ぶことができた。	8	2	0
4	訪問先でのマナーはよかった。	3	6	1

A:よくできた, B:できた, C:不十分

表 8 活動で気づいたこと・わかったこと (児童)

( ) 内の数字は回答者数、1名は省略

《わかったこと》	
・大豆にはいっぱいたんぱくしつが入っていることが分かった。(2)	
・1000年前に、大豆が日本にきたことが分かった。(2)	
・大豆は、インドから中国、中国から日本にきたことがよく分かった。(6)	
・大豆にもいろいろな種類があることがわかりました。(2)	
・大豆が畑の肉というのがよくわかりました。(2)	
・大豆にはいっぱいひみつがあることがよく分かった。	
・大豆からいろいろな食べ物ができることが分かった。(4)	
・どうして大豆という名前になったかが分かった。	
・たくさんの栄養があることがわかった。(2)	
・大豆についていろいろなことが分かった。学んだ。(5)	
・大豆はタンパクシツが、肉よりいいということが分かった。(3)	
・ごまどうふはどうふのなかまだけど、大豆でできていない。(2)	
・えだまめにもへんしんするからビックリしました。	
・いろんなことを勉強してものしりになってうれしかった。	
《中学生へのコメント》	
・質問にも分かりやすく、ちゃんと答えてくれたからうれしかった。(2)	
・中学生のみなさんは、よくしらべている・研究しているなあーと思いました。(3)	
・クイズやものがたりになっていたのでおもしろかったです。(8)	
・見やすく、とても分かりやすい説明でした。(5)	
・また、いっしょに勉強させてください。教えてください。(3)	
・たいへん楽しく勉強することができました。(2)	
・「中学生はさすがだな」「ぼくもあんな中学生になりたいな」と思いました。(3)	
・今日はほんとうにありがとうございました。(6)	
《生活の変化》	
・これからいっぱい大豆・豆腐を食べようと思いました。(5)	
・大豆のことが好きになつた。(2)	
・最初は大豆についてきょうみがなかったけど、もっとしりたいなと思うようになった。	
・大豆のことについて研究してみたい。(2)	
・牛乳がきらいだから、牛乳のかわりに大豆の料理をたべたいと思います。	

表 9 食育に関連する学習カリキュラムの開発 (中学校)

授業回数	主な活動内容
1時間目	オリエンテーション, 学校農園で作物の観察と収穫
2時間目	学校農園での収穫物を使った調理実習, ゲストティチャーによるお話
3時間目	小学生と協同の調理実習
4時間目	担当する食材(大豆や甘藷など)の栄養・特徴について調査, 映像・書籍・インターネットによる情報収集
5時間目	電子絵本またはフェルトの絵本の作成計画書の検討・作成, インターネットや書籍を使って情報収集
6時間目	電子絵本またはフェルトの絵本の制作
7時間目	電子絵本またはフェルトの絵本の制作
8時間目	電子絵本またはフェルトの絵本の制作, 発表(読み聞かせ)の準備
9時間目	幼稚園または小学校での発表(読み聞かせ)
10時間目	学習のまとめ

流会の感想の中に「幼稚園児の実態」に対する感想が多く述べられている。また、十分実態を捉えることができなかつたための失敗談、反省も述べられている。次年度は、幼稚園児がきんとんを作る際に、指導支援者として参加させることが望ましい。制作時間が短かつたにもかかわらず、各班とも完成度の高い絵本を作成することができた。これは、明確な対象や目標が設定されていたことによるものであると推察できる。さらに、今回の学習は家庭科の被服や保育に関する学習の発展題材としても効果があることが明らかとなった。

### 中学校における食育カリキュラムの開発

平成17年度実施した附属中学校における食育の実践と生徒の感想、調査結果を基に、食育カリキュラムの開発を行う。なお、附属中学校の選択授業に当てる時間数を考慮し、10時間取り扱った。

平成17年度に実施したカリキュラムの改善点として、①中学生に栽培の体験・収穫体験をさせる、②絵本作りの対象となる園児・小学生との交流の場を設定する、③地域の食材や食文化についての話を聞く機会を設けることを考慮した。

開発した食育に関連する学習カリキュラムを表9に示す。具体的には、1時間目に実際に栽培している作物の観察や手入れ、収穫の体験を行わせる。2時間目は収穫した作物を材料に調理を行う。3時間目は選択技術の生徒は小学校と合同で、大豆を使った食品作りを体験させる。具体的には、味噌、きな粉、豆腐作りを行う。選択家庭の生徒は、幼稚園と合同で甘藷を使ったきんとん作りを行う。4時間目はプレゼンテーションソフトの基本操作やフェルトの絵本の材料、縫い方等の確認を行うとともに、甘藷および大豆を題材とした絵本の作成計画書の検討を行う。この時、対象の実態や嗜好を考慮し、楽しく分かりやすい絵本となるように留意させる。5時間目はインターネットや書籍を使って情報を収集しながら、絵本の作成計画書を完成する。地域の食文化や食生活の改善につながるような内容構成になるように留意させる。6～8時間目は、インターネットや書籍を使って情報を収集しながら、絵本の作成を行う。8時間目の後半には、各班毎に発表（読み聞かせ）の練習を行う。他の班から出された改善案を

検討しながら、絵本の修正を行う。9時間目は、幼稚園児および小学生に対して読み聞かせを行うとともに、質問の時間を設定する。10時間目は学習のまとめを行う。これらの実践が、自分自身の食生活の見直しや改善につながったかという視点でも評価を行わせる。

### おわりに

中学校の選択技術および選択家庭において、小学生、幼稚園児を対象とした食に関する絵本作りを中心とした活動を実施した。具体的には、幼稚園児、小学生、中学生に対して、作物の栽培、調理、調べ学習、絵本作り、読み聞かせなどの活動を通して、食生活の改善と望ましい食環境作りを目指す実践を行った。さらに、食に関する絵本を媒体にして、幼稚園児および小学生と中学生間の交流を図った。本実践より、食育に関連する学習カリキュラムの開発に関して、以下の知見を得た。

(1) 絵本作りの前に、対象の実態を知るための交流の機会を設ける。

(2) 題材とした作物について、実際に栽培する体験、地域の人からそれらの作物について話を聞く体験を設ける。

また、食育に関連する本実践により、以下の教育的効果が見られた。

(1) 絵本作りの活動により、題材とした作物や製品に対する知識が広がった。

(2) 読み聞かせや調理体験の交流により、幼児や児童に対する理解が深まった。

(3) 読み聞かせ活動は、食生活に対する見直しの機会となった。

なお今後、異年齢集団のコラボレーションによる食育を継続的な取り組みとして展開するためには、カリキュラム上の明確な位置づけを行うことが検討課題である。

なお、本研究は、(社)農産漁村文化協会による「食育実証研究助成事業」の助成を受け実施したものである。

### 参考文献

- 1) 嶋野道弘・佐藤幸也：生きる力を育む食と農の教育，家の光協会，2006
- 2) 農文協編：食育のすすめ方6つの視点・18のプラン，農山漁村文化協会，2005